

「洋画技術法講座」

本箱を掻き回していたら「洋画技術法講座」(昭和33年2月発行・230円・美術出版社)という僅か100頁ほどの薄いA5版の本がでてきた。石井柏亭、小山良修、荒谷直之介、鈴木信太郎、脇田和の5氏の分担執筆で、この中に「淡彩画の技法」と言う一章があった。ここで鈴木信太郎さんが、次のように言っている。

「・・大きな画面でなく、短時間でてごろの画想を纏めたいとか、デッサンではちょっと物足りない、色のうるおいがほしいとか、ある種の記録を止めておきたいとかその他いろいろの意味でそういう近代人の持っている気持ちにうまく合うのが淡彩の画面だと思います。

しかし淡彩では色数が節約されていればいるほど効果的だと言うことは注意してもらいたいことです。といって、もちろん水彩画が完成に至らない中途のような色の着けかけが淡彩ではありません。淡彩は独立した絵なのです。そういう点で、相当絵が描けないと本当の淡彩の仕事は出来ないと想います・・・」

昨秋、8回目の淡彩展を開いた。評判の良かったのは、多摩川の連作を除くと「井の頭公園にて」の3点と「石神井池にて」の2点であった。いづれも、悠遊会写生会での早描き、走り描きである。前者は八王子の娘子軍が三々五々に写生している後姿を盗み描きしたものであり、後者は残雪のある池の風景だった。いづれも、A5版ほどの小品で二・三色を薄く塗った物だった。

上手く描こうとか、人に見せようとかという意識の感じられない絵だった。模写して、保存しておこうと思ったが。何枚模写しても上手くゆかなかった。展覧会に出すとき値段を2万円にした。人手に渡したくなかったからである。これが、最終日までに全部売ってしまった。何故、自分の気に入った作品を何枚模写しても原画を越えることが出来なかったのか。いろいろ考えられるが、その時の現場の条件を再現できないのが根本的な理由だろうと思う。一方、多摩川へは週に3回は描きに行くが、時々納得のゆく作品ができる。同じ場所だから気負いも無しに、何枚でも描けるからだと思う。

この場合もA4~B4版でせいぜいデッサン10分、彩色15分くらいである。色数は3~4色である。20余年たって、鈴木信太郎さんの言った淡彩の入り口にやっと立ったような気がする。

また、同じ場所に飽きるといのは、淡彩を心がける者にとっては無用なことに気が付いた。同じところを繰り返し描いていると不思議なことにデッサンも彩色も段々淡くなってゆくからである。これを自分も喜ぶし観る人も喜ぶ。

(2001,4,20)

新井 俊郎

酔筆(1)・・ アルコールの効用

「随筆」、「漫筆」は字引にあるが、「酔筆」はない。字引にない言葉を使うのは、酒を飲みながら自由自在な文章を書いてみたいからである。私は血圧も平熱も低い。血圧は上が110~120で、下は70~80である。巷間の学説では90を引いて年齢を算定するから、私の歳は20歳から30歳になる。平熱は34~35度なので、37度をこえると辛い。何をやる気もなくなる。食欲がなくなる。体がだるくなる。30年来、かかりつけている開業医のSさんは熟知しているからいいが、入院した時は困った。37.2度もあるのに、食道の造影検査をやられた。いまでも、恨み骨髓に達している。しかし、血圧が低いからアルコールと塩分はお構いなしで、敬愛するSさんが保証してくれている。彼は3年前私の癌を見つけてくれた恩人である。

アルコールが入ると頭の回転が早くなるし、勘働きが良くなる。作歌したり、作文したり、読書をしたりするとき、次々と想念が湧いて来る。言葉が溢れて来る。

絵を描くときは、少し違う。歌文章書くときのように、ちびりちびり飲みながら描くのは駄目である。また、一気にたっぷり飲んでおいて、描くのも駄目である。私の場合は、描きながらビールを350CC1缶とウイスキーのダブル、グラス1~2杯がいいようだ。之は、勿論家にいて静物や人形を描くときのこと、野外でのことではない。これ以上飲むとダーマトグラフや鉛筆やペンや絵筆の使い方が大胆になり、描いているときは気持ちがいいし楽しいが、酔いが覚めて次の日スケッチブックを開くと大抵はがっかりする。

(2001,6,10)

(2001-5-14)